

祇園祭を軸とした 次世代型山鉾町コミュニティのあり方

7班メンバー

駒ヶ嶺 光 (京都大学農学部 1 回生) 下稲 理子 (京都大学経済学部 2 回生) 上田 早紀 (京都大学医学部 4 回生)
杉本 光清 (大和リース株式会社) 升田 陽子 (株式会社電通)

テーマの背景・目的

持続可能な社会では、人々のつながりが重要である。人々をつなぐ大きな求心力が、祭にはあると私たちは考える。しかし現在、日本の町や村では祭の存続・継承に悩み、人々のつながりが希薄になっているところが多い。

祇園祭は 1000 年以上も続いてきた。そして山鉾町は長年にわたって人々をつないできた。そんな持続可能性のヒントを秘めている山鉾町にヒアリングを行い、令和時代の祇園祭を支えていく「人」たちに迫った。

調査方法

2つの山鉾町について調査を行った。

- ① マンションが建ち、たくさんの新住民がコミュニティに入ってきた「菊水鉾」
- ② 予期せぬ災害で「休み山」となっていたが、約 200 年ぶりの復興を目指し、これから山鉾町としてのコミュニティの再建を試みる「鷹山」



- ・ 既存資料の収集
- ・ 京都文化博物館 祇園祭関連展示
- ・ 鷹山の復興にまつわる講演会
- ・ 祇園祭期間中の山鉾町見学
- ・ 「菊水鉾」保存会理事長ヒアリング
- ・ 「鷹山」保存会理事長ヒアリング



内容・結果

山鉾町に住む人々も代替わりしあるいは町から離れ、「誇り」を持って祇園祭を支え、競い合ってきた人が減りつつある。地元に定着し熱意と責任をもって祭に関わってくれる人を求めているのは、祇園祭も全国の存続危機にある祭も同じ。



■ 祇園祭・山鉾町の存続の脅威

かつて… 天災や戦乱

(鷹山は 1826 年の大雨で懸装品を汚損し、巡行中止→ 1863 年金門の変で焼失)

現代… 「人」

生活様式の変化 → 核家族化、サラリーマン世帯の増加。
グローバル化 → 国内外からの観光客の増加。
コンプライアンス → 過度な安全対策による様々な制限。
これらが祭の持つ自由度を奪い、窮屈にしている。

■ 祭を続けていくために重要なこと

「祭りは預かりもの」(菊水鉾保存会理事長の言葉)

過去からの財産を預かる「責任感・義務感」

伝統文化継承への「強い思い」

「楽しい祭の記憶／思い出」

子ども時代からの「あこがれ」

同じ思いを持つ仲間との「つながり」

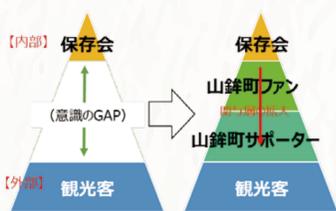


考察 (祇園祭からの学び)

■ 時代を経て変わったところ＝「令和の課題」

「次世代の育成／継承の仕組みの脆弱性」

祭を続ける責任感 ↔ 関わりたいが入り込めない人々
継承者だけでなく、祭の「積極的関与者」拡大がカギ。



実は祇園祭に関わりたい
ファンの発掘・育成

- ・ 山鉾町外居住者
- ・ 京都に勤務する人
- ・ 京都で学ぶ学生
- ・ 地元の祭がない人

持続可能に向けた仕組み化

提言

持続可能な団体との事業パートナー化による 新時代のまちづくり

山鉾町の責任 × 持続可能な団体
win-win

例えば…



山鉾町 A × 大学研究室
※SDGs 教育の一環として学生と共に

山鉾町 B × 体育会学生
※勝利祈願&資金集め/地域貢献活動

山鉾町 C × 民間企業
※SDGs 企業ブランディング (町内出店・社員参加)



全国・全世界の祭の継承問題への応用

■ 変わらなかったところ＝「学び」

「祇園祭は山鉾町の連合フェスだった！」

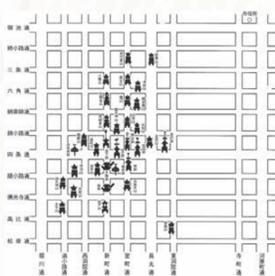
「祇園祭」という一つの祭ではなく、各山鉾町の保存会がそれぞれの山鉾を守り続ける 34 個の祭り。

各山鉾町の
盛りどころとなる 精神性・願い

※ご神体/由緒の違い

山鉾町同士の 健全なライバル心

※競い合いと助け合い



祇園祭の知恵を全国の祭へ転用

連合フェス発想による地球規模での 持続可能な「伝統行事」へ

精神性・願い
=SDGs との紐づけ

健全なライバル心
=合同 PR の枠組

【例】



五穀豊穡



疫病退散



商売繁盛



世界平和

【参考事例】



東北 6 県を代表する夏祭りが競演する「東北六魂祭」。集客に貢献。
<https://www.g-mark.org/award/describe/40560>